

そしてだからこそ、なによりも、若者“文化”に関する研究を今後も継続していくことが、重要だといえるのではないだろうか。状況に抗って、排他的でアンチリベラルな方向へと熱狂化していく若者たちの動向は、日本におけるいわゆる「ネトウヨ」であったり、ドイツにおける「ネオナチ」など、枚挙に暇がない。だが、その一方で、こうした動向に対抗しつつ、流動的な状況に倅差してどうにか適応し、寛容でリベラルであることを保持しようとする若者たちの動向も近年では目立ちつつある。日本においては2016年に解散したが、いわゆる安保法制に反対した「SEALD's」による社会運動がその代表例であろうし、イギリスにおいても若年層においてはEU離脱に反対する動向が目立っていたといい（ブレイディ2016）、さらにアメリカ大統領選挙でも、民主党内の候補者選定段階においては、若年層を中心に、きわめてリベラル色の強いバーニー・サンダース議員への支持が集まっていたという（保坂2016）。こうした動向は、単に政治経済的な動向とだけ理解するのではなく、むしろ若者たちのアイデンティティと深く関係した、文化的な現象として、今後さらに注目していく必要があるといえるだろう。

そして第二に強調しておきたいのは、社会の流動化ゆえに、先行きが不透明になり、模索せねばならない段階にあるのは、実は若者に限らないということである。むしろ若者を象徴的な対象として注目し、記述してきた本論文の内容は、今日においては、この社会を生きるすべての人々に突きつけられている論点だといっても過言ではないだろう。

はたして、今日の「模索期の文化」が、今後どちらの方向に近づいていくのか、さらに継続的に分析を積み重ねていくことが重要だといえよう。

（辻 泉）

（本論文は、2014年度中央大学特定課題研究費研究「ポピュラー文化の現状および歴史の変遷を記述するため

の方法論的探求」による研究成果の一部である。）

- 1) 以下、この論文については、「87年論文」と略して記すことがある。
- 2) 1990年代以降の若者論の主なトピックを列挙しても、「宗教ブーム」、「ぶちナショナリズム」、「ネット右翼」、「援助交際」、「ネット・ケータイ依存」、「ひきこもり」、「アダルトチルドレン」など、否定的なラベリングが目立つのが分かる。なお、「宗教ブーム」については、島田（1992）、「ぶちナショナリズム」や「ネット右翼」については、香山（2002）、「援助交際」については、黒沼（1996）、「ネット・ケータイ依存」については、小此木（2000）、「ひきこもり」については、斎藤（1998）、「アダルトチルドレン」については、斎藤（1996）などを参照のこと。
- 3) なお東京都内について杉並区が対象とされたのは、平均的な住宅地の集まった地域であるということ、人口規模が松山市と近いということ、「若者文化」を対象とした先行の調査（先述の青少年研究会調査など）でも対象地になっていることなどによるものである。
- 4) なお「90年調査」の場合、質問ごとに選択肢の内容が異なっていたのだが、紙幅の都合上、「05年調査」「09年調査」「15年調査」では「あてはまる～あてはまらない」の4つの選択肢で統一した。そのため、比較に当たっては、それぞれを「肯定的／否定的」傾向の回答で、カテゴリ統合した上で行うこととした。
- 5) 「90年調査」ではこうした項目は「個人性領域」に含まれていたが、本論文ではその内容に鑑みて、「遠隔＝社会領域」に含まれるものとした。
- 6) 「90年調査」での変数名がB1～B18にあたる項目は、いわゆる「人格類型論」において対象者を分類するための項目であるが、本論文ではその内容に鑑みて、「個人性領域」に含まれるものとした。
- 7) 以降も含め、「05年調査」「09年調査」「15年調査」については、東京都杉並区と愛媛県松山市の結果についての統計的検定を行っており、表中にアスタリスクを用いて有意水準を示すこととする。すなわち、\*\*\* = 0.1%水準で有意 ( $a < .001$ )、\*\* = 1%水準で有意 ( $a < .010$ )、\* = 5%水準で有意 ( $a < .050$ )、n.s. = 有意差なし、である。
- 8) 以降も含め、設問の冒頭には「90年調査」時に

おける設問番号を併記することとする（ただし、「05年調査」から追加された項目については、「05年調査」時の設問番号を併記する）。なお表中には、「05年調査」「09年調査」「15年調査」の際の設問番号も併記しておく。

- 9) 前回論文では、さらにほかのネガティブな内容の項目の増加傾向にも注目していた。たとえば、「C1 「死」について考えることがある」については、90年55.7%→05年78.3%→09年79.2%と大きな増加傾向にあり、松山市の結果との間にも有意差は見られなかった。「15年調査」では、ワーディングを「「死にたい」と思うときがある」と変更したところ、杉並区で32.0%と大きく割合が減少し、また松山市の結果との間にも有意差がみられなかったが、これをもって、ネガティブな内容の項目への回答傾向が減少傾向にあると解釈するのは危険だろう。前回論文でも指摘したように（辻・大倉・野村2016）、「「死」について考えることがある」といった場合には、リアルに自身の死を想定しているというよりも、ある種の超越的な思考を行っている可能性があり、その点では、増加傾向が続いているかもしれないためである。
- 10) 90年調査では質問文が「あなたには「どうしても理解できない人」がいますか?」となっているが、05年以降の調査よりも広い対象について尋ねているにもかかわらず05年以降よりも選択割合が低いことから、比較に際して問題はないと判断した。
- 11) 親友数については「q40.1 親友（恋人を除く）の人数」から外れ値（30人以上）と無回答を除外したものの平均を記載した。同様に同性親友数は「q40.1m/w 同性の親友の人数」から無回答と「11人以上」を、友人数は「q40.2 仲のよい友人（親友を除く）の人数」から無回答と「101人以上」を、知人数は「q40.3 知り合い程度の友人の人数」から無回答および「401人以上」を除外した。
- 12) 「q40sq2.1~12 あなたが「親友」「仲のよい友人（親友を除く）」とした人たちは、どこで知り合いましたか。」に対する選択肢のうち、2005年・09年・15年で共通する9項目（「学校」「塾や予備校」「職場（アルバイト除く）」「学校・職場以外のサークル・習い事」「アルバイト先」「近所づきあい」「街や通り」「インターネットや携帯電話のサイト」「その他」）に対する選択数を足し合わせたものの平均を計測した。なお「学校」は小学校から大学までの全学校段階を指し、短大や専門学校などを含むが、2015年調査のみ幼稚園・保育園も含んでいることを付記しておく。
- 13) 90年調査では、「友達とのおしゃべりで、社会問題や時事問題を話題にすることがあるか」と尋ねている。
- 14) 当該項目は調査時点でのソーシャルメディア利用を計測するために、2009年では「ブログやSNS（mixiなど）での人づきあいは面倒だと思う」、2015年は「Twitter, Facebook, LINEなどでの人づきあいは面倒だと思う」となっており、例示されているウェブサービスがやや異なるが、比較には問題ないと判断した。
- 15) 人類学者のR.M.Dunbarは、人の認知可能な個体数の上限を約150人としている（いわゆる「ダンバー数」、Dunbar 2010）が、家族・親友・友人・知人に加えて学校教諭や職場の同僚などを含めれば、杉並の若者の人間関係が150人に近い数値となっている可能性は十分にあるものと考えられる。
- 16) 選択肢は「仕事やアルバイトをしているとき」「勉強しているとき」などの行動項目と、「友人や仲間といるとき」「交際相手といるとき（2009年は「親しい異性といるとき）」などの対人関係項目からなる。なお2009年調査の質問文は「あなたが、何かに熱中したり夢中になれるのはどんなときですか。」であり異なっているが、すべての選択肢が一律に増加あるいは減少しているわけではないことから、割合の比較に注意しつつ増減を見ることには意味があると考えられる。
- 17) 当該項目は地域差と性差が大きいですが、地域と性別で標本を分割すると標本数が100人に満たないグループが生じてしまう。そのため、一番目と二番目の割合を合計した数値を記載することとした。
- また、当該質問文は2009年調査まではそれぞれ「女性に／男性にもてるのに必要だと思う条件」「女性を／男性を評価するときの条件」となっていたが、多様な性的指向に対応するために2015年調査で本文記載の文言に修整した。また、選択肢はそれぞれ「金持ち」「容姿がいい」「性格のよさ」など11項目だが、選択割合が1番目・2番目を合算してもすべての調査年で10%に満たない「学歴がいいこと」「家柄がいいこと」「スポーツができること」の3項目